

巻頭言

前原 英夫

〈〒719-0252 岡山県浅口郡鴨方町六条院中 2010〉

e-mail: maehara1@kcv.ne.jp

国立天文台への改組（1988年）当時は、我が国の光赤外の分野は深いジレンマに陥っていた。大口径望遠鏡の建設は焦眉の急であり、すばる望遠鏡へ向けて精力的な議論を行い、基礎的な開発や実験を開始していた。他方、製作に要する10年間は、大口径にバトンタッチすべき機器開発と研究とを維持し、若手を育成しなければならなかった。現実には岡山188cm望遠鏡の時間を研究者が取り合い、共倒れが顕著になったのである。賛否両論の中でスクリーニング制が船出したのもこの時期である。

このような状況の中、われわれは三鷹の関係者と「岡山会議」を組織し、長期的な将来計画を策定すべく議論を重ねていた。そこでなされた一つの決定は、最先端の観測装置を開発・製作し、188cm望遠鏡で重点的に運用し、世界の趨勢に遅れを取らぬようにすることであった。この方針に基づいて最初に製作された装置は、近赤外波長域の本格的な共同利用装置であるOASISである。これはシューメーカー・レビー第9彗星の木星衝突（1994年）の観測に始まり、星生成領域の研究等で成果を出し続けている。

188cm望遠鏡ではクーデ分光器を用いた高分散分光観測から、星の物理状態や化学組成を求め多くの研究が長期間行われてきた。しかしながら、時代の変遷とともに、研究の動向に対応してクーデ室には多数のユニットが組み込まれ、写真からCCDへの移行という紆余曲折を経て、世界の最先端から水をあけられていた。この高分散分光を蘇らせたのが、大型装置の2号機であるHIDESである。ところで、このような大型装置の製作は、数人が専念して5千万円の予算と3年の期間を超える規模となる。

製作から立ち上げに至る行程は泉浦さんが詳細に述べているが、彼はこの装置の責任者として絶えざる情熱を注ぎ込み、職員や若手研究者を指揮した。また、観測所も自らのプロジェクトとして自力更正モードで進め、組織や予算も同時進行で整備した。大枚をはたいて大フォーマットCCDと回折格子を買い込み、口径20cmを超えるカメラレンズは業者に製作を依頼した。そして、それらのデュアーやセルや取り付けのハード、さらには制御やデータ取得の計算機プログラムに対して、地道な人海戦術を取った。このようにして、HIDESは岡山でできる最高のレベルの観測装置となった。

今回の特集ではHIDES本体とその初期成果について紹介するが、本格的な研究成果についてはまた改めて触れたいと思う。この小文を閉じるに当たり、名前の由来についてコメントしておきたい。装置がほぼ完成という時に、名前を付けようという話が持ち上がった。先輩のT氏から、High-Dispersion Echelle Spectrographを縮めてHIDESはどうか、という提案を受けた。真つ当な名前なのだが、責任者である泉浦秀行と前原英夫の名前にちなんでヒデズとも読めるね、といわれて、苦笑してしまった。そんな事情もあり、手塩にかけた装置が期待に違わぬ活躍をしているのは、大きな喜びである。